

---

# 魔法少女リリカルなのは～原作破壊の転生者～

A c t

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは～原作破壊の転生者～

### 【Nコード】

N3868X

### 【作者名】

Act

### 【あらすじ】

最高神のミスで死んだ少年は、最高神の娘の神の少女によって【リリカルなのは】の世界へ転生。この先どう生きるのか、原作介入？ ハーレム？ どうなるかは、作者の気分と電波受信によって決まる・・・のかなあ？

## ブローグ〜テンプレ的なアレの予感〜(前書き)

この作品には、厨二・チート・原作崩壊・ご都合主義などが含まれています。ご注意ください。

## プロローグ〜テンプレ的なアレの予感〜

「ここは・・・何処だ・・・？」

俺は・・・

少年は一人、地の果てまで続く草原に佇んで自身の記憶と数分前のことを思い返していた。

「良かった、ちゃんと来れたみたいね？」

「ッ!？」

突如目の前に気配を感じ、声を聞き驚き身構え目を見開く少年。その目前には、白いロープの様なモノを纏った金色の髪の少女が居た。

「どういうことだ・・・？」

確かにさっきまでは・・・

「誰も居なかったのに」かしら？」

「!？」

「あら、驚かせてしまったかしら？」

金色の髪の少女は楽しそうに、まるでイタズラが成功して喜ぶ子供のように、クスクスと笑う。

俺の考えが・・・読まれた？

「はい、正解

貴方、結構頭良いのねえ？」

「・・・何なんだよ、アンタは」

「“誰”ではなく“何”と聞くのね。  
ますます面白いわ、貴方・・・。」

少女は、またも楽しそうに笑う。

「そうね・・・貴方達の基準で言うなら、私は・・・。」

少年にゆっくりと近付き、蒼い瞳で少年の瞳を見つめ、ゆっくりと口を開き・・・

「神様・・・かしら？」

そう言い、ニツコリと微笑んだ。

「OK・・・解った、アンタがメンヘラな自称神だとして、その神様がいつたい俺に何の用だ？」

「あら酷い、メンヘラだなんて、心外だわ」

そう言い、頬を膨らませる、少女・・・神は拗ねたように言う。

「まあ、いいさ・・・神様だって言うなら、俺がここに居る理由、それと用件を聞かせてくれ。」

「あら、信じてくれるのかしら？」

「俺の記憶違いじゃないなら、俺は死んだはずだからな……。まさか神様がこんなヤツだなんて、思っても居なかったが。」

「なあに？　じゃあ貴方は髭の生えた禿頭の老人みたいなのが良かったの？」

「あゝ……。大体イメージはそんな感じだろ？」

「まあ、なかにはそういう神も居るわねえ」

「で？」

「ん？」

「俺がここに居る理由と用件だ」

「ああ、そうだったわね。」

「貴方……。転生って、興味ないかしら？」

神の少女は笑顔で少年に問いかける。

「は？　転生？」

「転生って……。アレだよな？」

「二次小説とか、そう言うテンプレ的な……」

「そう、そのテンプレ的な、よ？」

笑顔で少年に答える神の少女。

「さらっと人の思考を読むな、いくら神でもプライバシー侵害だろ？」

「あら、ごめんなさい？」

悪びれた様子も無く笑顔で謝る、神の少女。

「だが・・・テンプレって言うなら、俺が死んだ理由は、アンタのミスか？」

それとも、死ぬのが早すぎたか？」

「・・・まさかとは思うが、暇つぶし・・・じゃないだろうな？」

「あら、結構色々詳しいのね、ちょっとビックリだね。」

まあ、貴方の場合はミスって言うのが一番近いわね、私のミスではないのだけれど・・・」

「どういう事だ？」

アンタのミスじゃないなら・・・じゃあ俺は誰のミスで？」

「非常に・・・言い難いんだけど、貴方、神についてどれくらい知ってるかしら？」

まあ、今はいいわ、ただね私の父・・・最高神で主神な父がミスで貴方を死なせてしまったのよ・・・ボケたのかしらね」

「ちょっとまで、じゃあ俺はその一番偉そうな神のせいで死んだと？」

「ええ、そうなるわ。」

私はその尻拭い……まったく、早く隠居すればいいのよあの老害……」

「さつきから、ボケたのかとか、老害とか……さらっと酷いこと言うなアンタ……」

少年は苦笑いしながら、神の少女の言った事を指摘する。

「いいのよ、それに貴方は一番の被害者でしょう？」

本来ならまだ生きてたはずなのだから。」

「いや……まあ、そうだが。」

終わった事は仕方ないだろ？」

過去は変えられないし、今後こういふ事が起きないように気を付けてくれればそれで良いさ。」

「貴方、人からよく利用されてたでしょ？」

「は？」

「御人好し過ぎるわよ、貴方。」

「ここは、怒っていい場面よ？　というか、普通は怒るものじゃないかしら？」

「あのなあ……怒ったからって、別に無くした物が帰ってくるわけでもないだろ？」

「そんな無駄な事はしない主義なだけだよ。」

「そう……まあいいわ。」



それで、転生についてだけど、どこかリクエストはあるかしら？」

「リクエスト・・・ねえ。」

「一応、貴方の生きていた時の情報を元に、特典もいくつか付けられるわよ？」

「それって、やっぱり・・・所謂アレか？」

「そう、所謂チート能力とかの事よ？」

「チート能力か・・・ならFateの世界は却下だな。

封印指定なんてされたら困る。

同じ理由から月姫も論外だ。」

「賢明な判断ね。」

「それ以外の世界なら、まあ・・・普通に生きていけるだろう。だから行き先はアンタに任せるよ。」

「解ったわ、それじゃあ、能力の方を決める前に、能力の上限査定しちやいましょうか。」

「上限査定？」

「そう、上限査定。」

まあ、簡単に説明すると、人は一定値で個々に幸せを得る権利があるの。

それをポイントとして消費して、幸せになったりするのよ。

よつするに、幸せという名の商品を買うための通貨ね。」

「なるほど・・・生きている間に、それを使って幸せを手にするってシステムなのか。」

「正解

さてと・・・貴方の残りのポイントは・・・って、何よコレ?」

「どうした?

まさか、俺のポイントは残高不足ってか?」

「・・・その逆よ、全くと言って良いほど、残高が減ってないのよ。」

苦笑い気味に頬を引き攣らせながら、呆れた様に言う神の少女。

「貴方・・・どうやって生きてきたの・・・コレ普通じゃないわよ?」

「あ? あゝ・・・まあ、俺は基本諦めてきたからな。」

「まあ、良いわ、コレだけのポイントがあるなら、どんなトンデモ能力だろうが可能よ?」

「そうか、ならココはテンプレ的に身体能力とか魔力とか全部規格外な強さで頼む。」

「本当にテンプレね、まあ良いわ、まだポイントはかなりあるから。ああ、それとコレ全部清算しないと転生できないからね?」



## プログラグくテンプレ的なアレの予感く（後書き）

という訳で、つい始めてしまったわけですが・・・やだなにコレ、  
黒歴史

の臭いしかしない・・・

まっまあ・・・その生暖かい目で見ていただければ幸いです・・・  
かね？

文才は投げ捨てるものって、じつちゃんがいつてた。

基本この先もgdgdで進んでいきます。

文章力？なにそれ？おいしいの？たべれるの？

転生者、目覚めた先は……（前書き）

今回、初戦闘になります。 戦闘とか・・・思いつきで書く物じゃないと見直して実感中……。 それでも見てくれるあなたは、優しい人です。 ではご覧ください。

転生者、目覚めた先は……

「痛つてえ……」

アイツ……そこはテンプレじゃなくて良いだろうが……」

……  
つて……おいおい、あそこまではテンプレだったのに……

なんなんだよ……この状況は!?

目覚めた少年は混乱した。

なぜなら……

「ここ……どこだよおおおおおお!?!」

山の森林の合間に、少年の叫び声が響き渡る。

「え? ナニこの状況? どう言う事? 普通テンプレならさあ、  
赤ちゃんからとかじゃね?」

なんで森の中?

しかも傾斜があるから、たぶん山?

「……どうしてこうなった」

とりあえず落ち着け俺……COOLになれッ!

まずは状況確認だ……。

そう考え、辺りを見渡す……。

「現状、俺は森の中。」

地面の傾斜を考えると、おそらく山か？

視線が低いのは・・・考えるまでも無く子供になったからだろう。

」

テンプレ的に考えて・・・。

「子供になったのは・・・まあこの際良いとしてだ・・・  
なぜ山？ なぜ森？」

まあ、幼児プレイ回避できたのは良いとして・・・

なんだよ、この状況・・・

「現状は、まあ一応解った・・・解りたくないが、理解した・・・  
はあ・・・次は持ち物だ、なにか・・・この状況を打破できうる  
物を・・・」

そう言い、ズボンのポケットに手を入れ・・・

「ん？」

違和感に気付く

「なんだ、コレ？ 手紙？」

少年はズボンのポケットから一通の手紙を取り出していた。

「・・・とりあえず、確認するか？」

自身に言い聞かせながら、手紙の封を切る。

「えっと・・・なにになに？」

「拝啓、お元気ですか？」

「この手紙に目を通していているという事は、無事に転生できたようですね。」

「無事に・・・なのか？」

「まず、現状目覚めた貴方のその世界での配置についてですが、所謂ホームレスです。」

「ホームレス小学生、本にしたら売れそうですね（笑）」

「（笑）って何だよオイ・・・」

「まあ、冗談はさておき、貴方のその世界での名前を、決め忘れていましたので、こちらで勝手に決めておきました。」

「ああ、容姿の方は私の趣味と偏見と世界の意味で、なかなかの物ですよ？」

「世界の意味？ なにそれこわい・・・」

「貴方の現在の名前は「シェイド・ロードスター」私の美的センスは最高でしょう？」

「なんか・・・厨二臭い・・・」

「ああ、それとこの名前の変更は世界の意味により無効ですのであしからず。」



「世界よ・・・俺に選ぶ権利は？  
・・・まあ、無いんだろつな・・・」

「最後に、貴方の最後の特典ですが、私のサポートという事になっ  
てしまいました・・・あの老害早く引退して欲しいですね。  
なにか連絡があれば、同封の携帯電話で連絡ください。」

貴方の女神より

「・・・なぜ携帯？ 貴方の女神ってナニ？ てかこの携帯・・・  
バッテリー切れてんだよおおおおおお！！！」

使えねエ・・・マジで使えねエ・・・とりあえず、俺の  
名前はわかった、見た目が厨二なもの、知りたくなかったが解った。  
わかったけど納得できねええ  
ええええええええ！！

「落ち着け・・・こんな所で騒いで、体力消耗したって良い事なん  
てないんだ。」

日はまだ高い・・・今から下山ルートを探せば、なんとかなるは  
ずだ・・・  
幸い・・・財布に少しは現金もあった・・・」

だが問題は、下山しても町があるかわからない、ココが  
どういう世界かも、正直言っただけ解らないから不安だ・・・

「まあ、考えたって答えは出ない・・・か。  
現状では判断材料が少なすぎるし、魔力とかはあるみたいだが・・・  
使い方が解らん・・・」

少年はそうひとりで言いながら、立ち上がり森の中を歩き始めた。

Side Change: ずずか

どろして・・・こんな事になっちゃったんだろう・・・

いつもと、同じ筈だったのに・・・

「まさか、あの月村のご令嬢を浚えるとは、こりゃ・・・俺たちにもツキが回ってきたかぁ？」

「今回のクライアントは報酬も良い上に、準備もかなり良かったからなあ。」

廃墟の中、縄で縛られ目隠しをされガムテープで口を塞がれた少女、月村すずかの周りで笑いながら話す男たち。

いつもと同じように学校に行って、なのはちゃん、アリサちゃんと授業を受けて・・・

お昼には三人で、いつもの様にお弁当を食べて・・・途中までいっしょに帰って・・・

その後は、アリサちゃんがお稽古に行って、私は塾に行って・・・

「で？ これからどうするよ？」

「あ？ どろするって？」

「ガキとはいえ・・・上玉だぜ？」

それなのに・・・どうして？

「何だよお前、そっちの趣味まであったのかぁ？」

「何事も挑戦してみるってのはアリだろ？」

それに・・・最近のガキは早いんだぜ？」

「なら・・・まあ、やってみるか？」

男の手が、すずかに迫る。

え？ なつなに？ 何を言ってる・・・

「ああ、それじゃ、邪魔な物はこつするかぁ？」

男の一人が、ゆっくりとすずかの服をナイフで裂いていく

「ッ！？」

うそ？ そんな・・・だって、私まだ・・・

すずかがそう思って居た時・・・

「ごめんくださーい？ 誰か居ませんか？」

廃墟の入り口から、少年の声と足音が聞こえて来た。

Side End Side Change...シサイド

あれから、目が覚めてから、ずっと歩いていた、何時間立っただろう？

もう、日は完全に落ちてる・・・正直、夜の森って怖いな

「今夜は・・・野宿かな・・・」

とりあえず、どこか雨風がしのげそうな場所を探そう。

寝てる間に雨に降られてもいやだし・・・ね。

「あつあれは！」

シエイドの目の前、数メートル先の木々の合間から、見えるのは一軒の廃墟だった。

「よかったあ・・・これで、雨風は凌げそうだ。」

安堵の息を零すシエイド、そして足早に廃墟の入り口へと足を踏み入れ

な？  
こういう場合でも、一応は言っておくのが礼儀だよ・・・

「ごめんくださ〜い？ 誰かいませんか？」

返事が無い、ただの廃墟のようだ。

「まあ、こんな山の森の中にある廃墟に居るのは、幽霊か誘拐犯か脱獄囚くらいだよなあ」

そうつぶやき奥の部屋へと入った瞬間。

「動くな！」

「!？」

え？ ナニこの状況？ え？ え？？

シェイドの目の前には、ナイフや銃を持った数人の男と、縛られ目隠しをされガムテープで口を塞がれた少女。  
少女の服はところどころ切られている。

「あゝ……えつと……」

この状況に、あの女の子の服装……

「ごういう場合……なんていえば良いんだっけ？」

俺……あまり面倒事とか好きじゃないんだけど、これは見過ごせないだろ……

「おとなしく黙ってじっとしてろよ？」

うん、助けた方が良いつて判断で、掃除でもしましよつかね。

「おとなしく？ 嫌だと言ったら？」

「コレが見えねエのか、ガキ？」

そういつて、銃をちらつかせる男。

ガバメント？ いや、大きき的にはグロツク系か？

数は・・・銃が三人、ナイフ四人の計七人か・・・

「嫌だと言つたら、撃つんですね？ なら・・・」

一瞬で、男たちの前から姿を消すシェイド。

『なっ！？』

いきなり消えたシェイドに驚く男たち・・・だが次の瞬間。

「蹴り・・・穿つ！」

「カハッ！？」

銃を持った男の一人がシェイドに蹴り飛ばされ、壁にぶつかり倒れ  
気絶する。

「撃たれる前に、倒しますね？」

七夜の体術・・・加減してアレかよ・・・今後はもう少し、  
改良しないと死人が出るか？

そう考えながら、また姿を消す

「クソッ、何処行きやがった！？」

銃を持った残りの男の一人が、シェイドを探して辺りを警戒する、

が……。

「はい、アウト。」

「なっ!？」

突如背後に現れたシェイドに驚き、振り返る。

「はっ!」

振り返った瞬間に、男の顎めがけて拳を振り意識を刈り取る。

「残り……五人ですね？」

「このガキツ!」

最後の銃を持った男がシェイドに向けて引き金を引くが……

「片手で銃をそんな風に構えちゃダメですよ？ 手首傷めたいんですか？」

「ガハツ!？」

引き金を引くよりも早く、シェイドの拳が男の鳩尾にミシミシと嫌な音を立てながらめり込む。

「これで、残り四人ですね。」

『ひいつ!?!?』

男たちが情けない悲鳴を上げた次の瞬間には、男たちの意識が途絶えていた。

「Gute Nacht・・・<おやすみなさい>」

さて、掃除も終わったし・・・このままって訳にも行かないよな。

そう、考えずずかの目隠しとガムテープを外し、縄を解く。

「大丈夫？ どこか怪我しなかった？」

そう優しくずずかに微笑みながら話しかける。



転生者、目覚めた先は………（後書き）

主人公、名前決定（笑）

戦闘とか……書くの下手な作者（失笑）

今後どうなる事やら……

原作キャラと初対面、ああ俺リリなの世界に来てたのね（前書き）

連投だけど、ご都合主義全開です。才能は投げ捨てる物・・・  
人生は諦めが肝心って、ばっちゃんがいつた。

原作キャラと初対面、ああ俺リリなの世界に来てたのね

こっ今度は、なに？ いきなり男の子の声が聞こえたと思  
ったら、次々に私を浚った誘拐犯さん達の呻き声と倒れる音が次々  
聞こえて・・・

「Gute Nacht・・・おやすみなさい」

助かった・・・の？

「大丈夫？ どこか怪我しなかった？」

「あ・・・え・・・？」

「この子が、助けてくれたの？」

「とりあえず、はい」

そう言い、すずかに自身の着ていた黒のコートを渡すシェイド。

「え・・・？」

「ほら、そのままだと風邪ひいちゃうよ？」

「あ・・・ありがとう／＼」

「どづいたしまして」

私と同じくらい・・・かな？

綺麗な銀の髪に蒼い眼・・・

「とりあえず、お家の人に連絡できそうかな？」

「うっうん。」

「そっか、よかった」

そう言い、また優しく微笑むシエイド。

「あの・・・」

「ん？」

「あなたは・・・？」

「ああ、俺？ 通りすがりのホームレスです。」

「・・・え？」

「あ・・・えっと、というのは冗談で」

苦笑いしながら、シエイドはさすがに自己紹介する。

「俺はシエイド、シエイド・ロードスター

君の名前は？」

「あっ 月村すずか・・・です。」

Side End Side Change...シエイド

えつと・・・ん？

ツキムラスズカ？ つきむら・・・月村すずか!？

ってことはココは・・・リリカルなのはEF世界!？

名前を聞いたとたんに、黙ったシェイドを心配そうに見つめるすずか。

「えつと・・・あの・・・？」

「えっ？ あっああ、ごめんね？ ちょっと考え事しちゃってて」

しかし、原作キャラ第一号が、すずかか・・・

「とりあえず、お家に連絡して迎えに来てもらおうか？」

「はっはい」

あー・・・なんだろう、見た目同じくらいの子に敬語使われるって、なんかやだなあ・・・

そう考えながら、気絶した男の一人から携帯電話を奪い、全員まとめて落ちていたロープで縛り上げる。

「はい、コレ使って？」

まあ、俺のじゃないけど・・・俺の、バッテリー切れてるし・・・

そして、奪った携帯をすずかに渡し電話をかけさせる。

少女電話中・・・

さすがに、このままココから逃げ出すとか出来ないし、家族の人が来るまでは、ここに居たほうが良いよなあ・・・？

それに、ココが片付かないと俺も寝れないし・・・

「あっあの・・・」

「ん？」

おっと、考えに耽り過ぎたかな？

「連絡できたみたいだね・・・？」

「はっはい、直ぐにお姉ちゃんが、迎えに来てくれるそうです。」

「そっか、よかったね。」

優しい笑顔で、すずかに言うシエイド。

「えっと・・・はい／＼／」

・・・あれ？　なんで赤くなるの？　テンプレ的フラグ？  
世界の意思？

今の俺には理解できないよ・・・

それから、数十分後・・・廃墟の前に一台の車が止まる。

「すずか！」

「お姉ちゃん！」

抱き合い無事な事を喜ぶ月村姉妹。

これで、大丈夫・・・だよな？

そう考え、こっそりその場を去ろうとする・・・が。

ここに居るのが、忍とすずかである、そうならば・・・例のあの人物が居ないわけは無いだろう。

「どこへ行くんだ？」

そう、その人物がこっそり去ろうとしたシェイドを止めたのだ。

高町恭也・・・月村忍の恋人で、この世界【リリカルなのは】の世界において主人公、高町なのはの兄である。

「えっと・・・俺が居たら、お邪魔かと思ひまして・・・」

この人が・・・あらゆるリリカルなのは二次小説でシスコンやらバトルジャンキーやら言われる、高町恭也さんか・・・

「そんなに畏まる必要は無いよ、君がすずかちゃんを助けてくれたんだろ？」

「えっええ・・・まあ、その・・・成り行きで・・・」

「成り行きで？」

「えっと、たまたま取り掛かった廃墟に入ったら、襲われまして・・・」

「こんな山奥の廃墟に、たまたま通りかかったのかい？」

そうだった・・・ここ山の中だった・・・

どうする？　なんて言う？　転生してきました　　なん

て言える訳が無い・・・それじゃあ頭の痛い子だ。

なっになにか、この状況を打破する言訳を考えるんだ・・・  
はっ！

そう考え、咄嗟に思いついた事を言おうと口を開くシエイド。

「その・・・実は俺・・・」

「まって、話ならこんな所でじゃなくて、私達の家でしましょ？」

忍がシエイドの話を止めて、そう提案する。

「そうだな、まだ春先とはいえここは冷えるし、すずかちゃんも早く帰りたいだろうしな」

「じゃあ、行きましょ」

「え？　え??？」

あれ？　どうしてそうなるの？　コレが所謂、ご都合主義

？　それとも神の意思とか世界の意思の表れなの？

普通、知らない・・・子供とはいえ男を家に連れて行くの

？　ナニコレ？



そう考えてる内に、忍・恭也・すずかと共にノエルの運転する車に乗るシェイドであった……。

少年少女移動中……

はい、やって参りました、月村家……

原作知ってるけど、ナニコレ？ ココはアヴァロン？ 桃

源郷？ アルカディア？ 猫好きの俺にとっては、なんとという樂園か！！

やばい……にゃんこかわいい……

「えっと、とりあえずそこに座って？」

そう猫を見ながら眼を輝かせてるシェイドに言う忍。

「えっ？ あ、はっはい……すみません、ありがとうございます」

やばい……あまりに猫が可愛いから、放心状態だった……

・結構恥ずかしい／／

そう考えながら、ソファに座るシェイド、その正面のソファには忍・すずか・恭也が座っている。

「まずは……妹を助けてくれてありがとう、えっと……シェイド君……で良いのよね？」

「あ、えっと……はい、どういたしまして……？」

誰かにお礼言われたのなんて、前世も含めて初めてだなあ。

・・・

「うん　私は月村忍、この娘・・・すずかの姉です、よろしくね？」

そう笑顔で自己紹介をする忍。

「で、私と反対側に居るのが、私の恋人の・・・」

「高町恭也だ、よろしく。」

「あ、えつと・・・はい。」

なに？　さつきから凄い観察とか、そんな感じの視線を恭也さんから感じるんですけど・・・？

まさか、例に漏れずこの世界の恭也さんもバトルジャンキ  
ー！？

「それで、君は どうして、あんな山奥に？」

そんな事を考えていると、不意に忍が訊いてきた。

「えつと・・・実は俺・・・  
気が付いたら、あの山に居て・・・どうしてあそこに居たのか、俺も・・・解らないんです・・・。」

あながち間違っちゃ居ないよな？　この世界での記憶も無いわけだし・・・原作知識はあるけどさ。

「え？・・・それって」

「記憶喪失・・・？」

驚き確認する月村姉妹と、黙って聞いてる恭也・・・恭也も少なからず驚いているようではあるが・・・

「えっと、はい・・・解っている事といえば、自分の名前くらいで・・・」

「これも嘘ではない、事実・・・今の俺自身の事で解っているのは、この世界での名前だけ・・・」

「・・・」

「お姉ちゃん・・・」

「ええ、わかってるわよ、さすが。」

なにやら考えている様子の忍に心配そうに問いかけるさすが。

「よし、決めたわ。」

何かを決めたようだ、笑顔で手を打ち決めた事を話し始める。

「シエイド君、君しばらくこの家に居なさい？」

「え？」

「は？」

「忍？」

上から、すずか・シェイド・恭也の順の反応である。

「ん？ なに？」

だってシェイド君、記憶喪失な上に住む場所も無いんでしょ？」

「たっ確かにそうですけど……」

どうしてそうなる！？ ありえないだろ！ 普通は警察に

連絡するとかだろう！？」

ナニコレ？ なんなんだよおおおおおお！？」

「それに、お礼も兼ねてだから、それと君のご両親とかは、私達で探しておくわよ？」

「え？」

両親？ いやまあ……子供の俺が居るんなら両親も居て当然だと思うが……だったら何故あんな場所に俺一人で居たんだ？

「だから、君の両親が見つかるまでは、家で面倒見てあげるわ。

幸い……家には妹のすずかと、メイドのファリンとノエルくらいしか居ないしねえ」

「え？ え？？」

ナニコレ？ 拒否権とか逃げ道つぶされた？ コレってものはや決定事項？

「はぁ・・・諦めてくれ、忍は一度言い出したら考えを曲げないからな・・・」

苦笑いしながら告げる恭也。

いやいやいや！　なんで！？　もう諦めた方が良いの！？

「えっと・・・よろしくね、シェイド君？」

・・・神よ・・・世界よ・・・これがあんた等の意思とかなのか？　拒否権は無いのか？　このままだと、原作介入も近いんじゃないか？

怪我だけはしないように気をつけよう・・・うん、もう諦めた・・・人生諦めが肝心だって、前世で学んでるし・・・

「はっはぁ・・・よろしくおねがいしま・・・す？」

こうして、シェイドの月村家での生活が始まるつとじていた・・・

原作キャラと初対面、ああ俺りりなの世界に来てたのね（後書き）

シエイド君、猫好きな一面があらわに！

そして、月村家での居候生活へ。

はたして、この世界に彼の両親は存在するのか！

そして、女神（笑）への直通携帯のバッテリー切れ解消は出来るのか？

今後もggggdggd続くと良いなあ・・・

## 主人公紹介的な駄文（前書き）

この先、大変な変態が居ますご注意ください。

## 主人公紹介的な駄文

作者「はいはい、皆さん、始めまして。

この駄文の発生源である、駄犬な作者 A c t でございます。」

シエイド「一応、主人公らしい俺、シエイドだよろしく。」

A c t「さてさて、厨二なシエイド君も来た事で・・・」

シエイド「誰が厨二か！」

A c t「・・・来た事で、今回はシエイド君の設定やら何やらを書いていくよ!」

シエイド「おいイ!?!」

A c t「じゃあ、いつてみよ」

流されやすい御人好し：シエイド・ロードスター

性別：男

神と名乗る少女に、転生させられチートな能力を与えられた少年。基本的に面倒事を避けるが、それでも気が付けば首を突っ込んでい  
る御人好し。

今作の主人公である。



## 能力設定

魔力量：E X

魔力制御：E X

幸運値：B +

身体能力：オールS ++

スキル：想像具現化

効果は、自身の脳内にある情報から、あらゆる物を作り出す能力。  
本人曰く、服とか作ると便利。

スキル2：インサイト

一度見た魔法の術式を見抜き記憶する能力。  
練習すれば再現可能であるが、面倒だからとやらない事が多い。

A c t「コレにプラスで、とある殺人貴の体術やら、カレー先輩の  
投射術や某掃除屋の黒猫の銃の技なんかを使えると、まさにチート  
だね！」

シエイド「なにこれ、チートすぎじゃね？」

A c t「気にしたら負けだよ、君はこれから各種魔眼も使っていく  
んだから！」

シェイド「俺をどうしたいんだ作者!？」

Act「・・・まだ決めてないよ？」

シェイド「なにそれこわい・・・」

Act「というわけで、こんなシェイド君の活躍する?お話を今後  
も書いていくのでよろしく、お願いします!」

シェイド「俺の拒否権はあああああ!？」

Act「あと最後に・・・罵声とか期待して良いですか?」\*

、  
（ハアハアノノノ」

シェイド「なにこれ・・・こんなのが俺の作者なの?」——orZ」

シェイドです、いま俺月村家の居候兼執事してます。(前書き)

本日最後の投稿、作業用モモイBGMの威力は偉大だな。  
書き始めたら次々浮かんだぜ・・・。

シェイドです、いま俺月村家の居候兼執事してます。

あの出会いの日から数日・・・シェイドは今・・・

「シェイドさん、次はそちらの部屋をお願いしますね？」

「はい、解りましたノエルさん。」

どうも、シェイドです。

俺は今現在、月村家にて居候兼執事をしています。

なぜこうなったかと言うと、話はすずかの家に来た、翌日に遡る訳で・・・

回想く月村家・居候生活初日く

「ん・・・ここは・・・？」

どこだ？

「ああ・・・そうだった、俺は」

転生して、いろいろあつて、すずかの家に居候する事が決まって、部屋に案内されて寝たんだっけ・・・？

「ん・・・」

眼をこすりながら、ベッドから起き上がるシェイド、そして室内時計を確認する。

午前6時・・・か。

「今後どうするかな・・・？」

そう考えながら、ベッドから降り、一応の身だしなみを整える。

着替えとかも用意しないとな・・・

幸い、現金も少しはあるし、服とこの携帯の充電器くらいは買わないとな・・・

そう考えながら、女神から連絡用にと与えられた携帯電話を眺める。

「というか、連絡用って言うなら、充電くらいして置いてくれても良いだろ・・・」

結構しっかりしたヤツだと思ってたんだが、どうやらそうでもないのか？

などと考えながら、携帯電話をズボンのポケットにしまう。

「今はとりあえず・・・顔でも洗いに行こう。」

そう言い、部屋から出て廊下を歩くシエイド。

昨日の内に、ノエルさんに屋敷内の使うだろう場所を聞いておいて正解だったな・・・聞いて無かったら正直、迷子になった。

「おっと、ここだった。」

考えながら付いた先は、洗面所の扉の前である。

「……あ」

顔洗うのは良いけど、俺タオル持ってねエ……

Side Change：ノエル

私はいつもの様に起きて、いま洗面所の近くに来ているの  
ですが……

「どうしたものか……ん……」

昨夜、すずかお嬢様を助けた少年、名前はシェイド・ロー  
ドスターでしたか？

その少年が、洗面所の扉の前で考え込んでいるのです。

これは、声をかけて事情を聞いてみたほうが良いでしょう  
か？

「あ……どうかしましたか、シェイドさん？」

「え？」

Side End Side Change：シェイド

どうやら、相当考え込んでたらしい、ノエルさんに声をか  
けられるまで気付かなかった……

「その……実は、顔を洗いに来たんですが、タオルが無いの思  
い出しまして……」

「タオルでしたら、洗面所内の籠に入っていますから、ご自由にお使いください。」

そう言い、お辞儀をするノエル。

「あ、はい……ありがとうございます。」

つられてお辞儀をするシェイド。

「では、私は朝食の用意がありますので。」

そう言い、一礼し去っていくノエル。

あれが、所謂瀟洒なメイドというものか……

などと考えながら、洗面所へと入るシェイド……そして鏡を見て絶句する。

OK……落ち着け、あまりに驚いて大声出しそうになっ  
たが……落ち着け、COOLに行こう……

「あの女神……どうしてこんな顔なんだよ……」

鏡に映った自身の姿を見て漏らすシェイド。

この顔って……アレだよな？ 某怒りの日の大隊長の一人  
人で白騎士の……

ただ、眼帯はしてないし、両目もある、でもなんで……

「なんで・・・オツドアイ？」

そういえば、あの手紙に・・・なんか書いてあったな、自分の趣味だとか、世界の意思だとかって・・・

俺、今無性に世界の意思とかアイツを殴り飛ばしたくなっ  
た・・・

「まあ、生活には支障はない・・・か。」

そう諦めの言葉を漏らして、洗顔を終えて鏡をまた見つめる。

「流石に・・・この眼は目立つな、なんとか、髪で隠せそうだが・・・」

そう言い、髪を弄りなんとか固目を隠す。

「コレで、なんとかなるか・・・」

そう思い、洗面所を後にする。

「時は進み朝食時・食堂」

「おはようシエイド君？  
よく寝られたかしら？」

食堂に入った時に、その声をかける忍。

「はい、おはようございます。」

「はい、とても気持ちよく眠れました。」



笑顔で挨拶をし、そう返すシェイド。

「そう、よかったわ

あら・・・今日は髪型変えたのね？」

「え？ あ・・・えっと・・・」

どう返せば良いんだ？ そういえば昨日は何もしてなかったからな・・・。

ああ、だから恭也さんがあんなに見てきてたのかな・・・？

「ああ、ごめんなさい？

気にしてたのなら、いいのよ？」

忍は聞いてはいけないことを聞いてしまったかと思い、慌ててフオーする。

「いえ・・・その、はい・・・」

上手い言訳が浮かばない・・・ここはこのままにしておくか。

そう思っていると、すずかがリビングに入ってくる。

「おはよう、お姉ちゃん、シェイド君」

ニッコリ笑顔で挨拶をして、席に着くすずか。

「あ・・・うん、おはよう、すずかさん。」

流石に、呼び捨てとかは・・・ねえ？

「うん・・・なんだか他人行儀ねえ・・・  
これからしばらく一緒に暮らすんだから、そんなに畏まらなくて  
良いのよ?」

「いいえ、お世話になるんですから・・・やっぱりちゃんとしな  
いといけないと思いますから。」

苦笑いしながら、答えるシェイド。

「気にしなくて良いのに・・・」

そんなシェイドを見て、呟くわずか。

「え?」

いま、何か言ったようなの?

「へえ・・・」

そんなわずかを見て、ニヤニヤ顔の忍と困惑気味のシェイド。

「っ／＼／」

そんな二人の反応を見て、赤面するわずか。

「あ・・・そういえば

お世話になるんですから、俺に出来る事があつたら、何でも言っ



え？ えええ！？

シェイド君が・・・私の執事・・・？

お姉ちゃん、いったい何考えてるの・・・？

「えっと、お姉ちゃん・・・？」

「なあに、すずか？」

忍はニコニコしながら、すずかに答える

「どござして、その急に・・・？」

「そっそつですよ、どうしていきなりそんな・・・」

「あら？ すずかはシェイド君じゃ嫌なの？

シェイド君も、すずかのお世話は嫌？」

え・・・？ 私は・・・どうなんだろう・・・

でも、もし・・・シェイド君が嫌だつて言ったら・・・私・

・・・

Side End Side Change：シェイド

何を言い出すんだこの人は！？

昨日知り合っただばかりの子供に執事！？

ありえないだろ・・・どうしてこうなった！？

「その・・・嫌とかではなくて、俺ではその・・・手伝いとか、あまり出来なさそうですし・・・

それに、すずかさんにはファリンさんが居るじゃないですか？」

そうだ・・・すずかにはファリンさんが専属で付いてるって、昨日説明もされた。

なのに、どうして急に・・・？

シェイドはすずかのほうを確認すると、何故か泣きそうになっていた。

えっと・・・どうして、すずかはそんな泣きそうなんだ？

「そうねえ、確かにファリンがすずかの専属で付いてるわ、でもね家で出来る事って言ったら、それくらいしかないのよ？」

それに・・・すずかだって、本当はシェイド君に執事してほしいんじゃない？」

笑いながら、すずかに言う忍。

「っ／＼／

べっべつに、私は・・・その、シェイド君が、嫌じゃないなら・・・」

なに・・・これ？ え？ どうしてこうなったの？

く回想終了く

とまあ、その後・・・俺に断れる筈もなく・・・現在の状況になっている。

神から貰ったチートの中に俺の知ってるアニメやゲームの能力が使えるってのがあったが・・・

読んでて良かった・・・八〇テのごく！・・・おかげ  
で執事やるのに支障はないしな・・・

Side End Side Change:恭也

「それで今、彼は執事をしているのか・・・」

何を考えてるんだ、忍は・・・

「そうよ

でも驚いたわ、あの子・・・なんでもそつなくこなすのよ。」

「ああ、俺も少し見たが驚いてるよ。」

あのノエルと同等かそれ以上にこなしていたからな・・・

「でしょ？」

それで、私も本腰入れて調べてみたんだけど・・・」

忍の表情が暗くなる。

「どうしたんだ？ 何かわかったのか・・・？」

「その逆よ・・・いくら調べても“シェイド・ロードスター”なん  
て子、居ないのよ・・・」

確かにロードスターという家は存在したわ。

でもシェイドなんて子は、何処にも存在しないのよ・・・」

か？  
どういう事だ？ なら彼は・・・嘘を言っていたというの

……いや、あの言葉に嘘はなかった、じゃあ……

「どづいづことなんだ……」

恭也は庭先で猫のブラッシングをしているシェイドを見ながら、誰に言ってもなく呟いた。

シェイドです、いま俺月村家の居候兼執事してます。(後書き)

はい、シェイド君の現状と調査結果でした！

シェイド君はいつたい、どういう理由であの場所に居たのやら？

・・・キメテナカッタワケジャナイヨ？

その辺りが解るのは、女神の携帯電話が鍵かなあ？



シェイドと後の魔王とフェレットモドキと原作介入の予感？（前書き）

さてさて、タイトル見たら解るが、そろそろ原作介入しようかという訳で、今日中に少しは原作介入していこうか！

## シェイドと後の魔王とフレットモドキと原作介入の予感？

シェイドが月村家で過ごす事になって早数週間・・・

どうもシェイドです、月村家での居候兼執事も大分慣れてきました。

しかし、未だに女神の携帯の件はバッテリー切れのまま・・・  
・どうしたものか。

あ・・・それと次期魔王様と会いましたはい。

・・・てか、俺っていったい誰に言ってるんだ？ これ  
も世界の意思なのか・・・？

だんだん厨二成分が増えるシェイドであった。

くその日の夜・リビングにてく

「お友達と、お茶会・・・ですか？」

「うん　なのはちゃんとアリサちゃんを家に呼んでね」

笑顔で楽しそうにシェイドに語るすずか。

ふむ、なのはとアリサとお茶会・・・

「それでね？」

なのはちゃんが、ユーノ君も連れてくるんだって」

「ユーノクン？」

ユーノ・クン？

はて……？ そんな人物……ああ、アレか。

「そう、フェレットのユーノ君」

「それは、楽しそうですね、すずかお嬢様。」

優しい笑顔で、そう告げるシェイド。

温泉がまだだったから、原作が終わった後かとも思ったが、  
どうやらまだ始まったばかりらしい。

それにしても……ユーノか……二次では淫獣やらと言  
われているが、さて……実際はどうなのか……

もし、お嬢様に何かしたら……潰すか……。

などと物騒な事を考えながら、笑顔ですずかの話を聞くシェイドで  
あった。

だが……彼はまだ解っていない、この出会いが……原作介入へ  
と繋がって行くことなど、知る余地もなかった……。

（時は進み、お茶会当日）

さて、準備は出来た、後は来客を待つだけだな。

それにしても……本当にすずかお嬢様は友人を大切に思  
っているんだな……

前世での俺には……そんな物……無かったっけ。

などと感傷に浸りながら、準備を進めるシェイドであった。

Side Change:なのは

なのはは、現在月村家へ向かうバスの車内である。  
無論、兄恭也も一緒に月村家へ向かっている。

今日は、すずかちゃんのお家でお茶会なのです。

私はアリサちゃんすずかちゃん、それと新しくお友達にな  
ったすずかちゃんの執事さんのシェイド君との休日を。

で、お兄ちゃんはすずかちゃんのお姉さん、忍さんに会い  
に。

「ん？」

なのはに見られていることに気付き恭也は首を傾げる。

「うっん、別に、なんにも」

「きゅ」

「そっか。」

「えへへ」

Side End Side Change:シハイド

ピンポン...

来た様だな。

「私が出ますね？」

「はい、お願いしますノエルさん。」

対応をノエルに任せるシエイド。

少しして、なのはと恭也、そしてユーノがなのはの肩に乗ってやってきた。

「あつなのはちゃん、恭也さん」

笑顔で友人兄妹を出迎えるすずか。

「すずかちゃん」

笑顔で答えるなのはと・・・

「きゅ」

人鳴きして応える、ユーノ。

「なのはちゃん、いらっしやい」

人懐っこい笑顔で出迎えるファリン。

「いらっしやいませ、なのはお嬢様、恭也さん。」

そして、笑顔で対応するシエイド。

「恭也、いらっしやい」

「ああ。」

笑顔で挨拶を交わす、忍と恭也。

「お茶をご用意いたしましょう。」

何が宜しいですか？」

優しい声で、なのはと恭也に問いかけるノエル。

「任せるよ。」

「なのはお嬢様は？」

「私もお任せします。」

笑顔で答える高町兄妹。

「畏まりました。」

ファリン？」

それを聞き、笑顔で了承し妹であるファリンを呼ぶノエル。

「はい、了解ですお姉さま。」

それじゃあ、少し行ってきますね、シェイド君。」

笑顔で敬礼しながら答え、シェイドに言うファリン。

「はい、それまでお嬢様方のことは任せてください、ファリンさん。」

「

それに笑顔で答えるシェイド。

「じゃあ、私と恭也は部屋に居るから。」

そうノエルに告げる忍。

「はい、そちらにお持ちします。」

それに笑顔で答え、お茶を持っていくことを伝えるノエル。

そして、ファリンとノエルは一礼して部屋を出て行き、忍と恭也も部屋を後にした。

シェイドは、椅子の上で眠る猫を抱き上げ、なのはの座る場所を空ける。

「ありがとうございます」

「いえ、お気になさらずに。」

笑顔で礼を言うのはに、笑顔で返すシェイド。

ああ・・・今日もにゃんこは可愛い・・・

そして、少女達の姦しいおしゃべりが始まった。

「そういえば、今日は誘ってくれてありがとうございますね?」

なのはが、アリサとすずかにそう言と・・・

「ううん、こっちこそ、来てくれてありがとうございます」

すずかはそう言い・・・

「今日は元気そうね？」

アリスが少し心配しているように言う。

「？」

とうの言われた本人であるのはは不思議そうだ。

「なのはちゃん・・・最近少し、元気なかったから・・・  
もし何か心配事があるなら、話してくれないかな？って、三人で話してただけど・・・」

心配そうに、すずかはなのはに問いかける。

「すずかちゃん・・・アリスちゃん・・・シエイド君・・・。」

眼を潤ませながら、三人の名を呼ぶのは。

あれ・・・？ この話の流れって・・・

「きゅん！！！！」

「！？」

ユーノ！？

子猫に追われ、逃げ回るユーノ・・・



「ああ！？ ユーノ君！？」

「ああ。アインだめだよ！？」

そして・・・タイミングが悪いのか良いのか・・・

「はい、お待たせしましたー

イチゴミルクティーとクリームクッキーです」

笑顔でなのはの分のカップと御茶請けのお菓子とティーポットをトレイに載せたファリンがやってきて・・・

不味いッ！？

もしファリンが転んで・・・猫が怪我したら！？

などと、猫を心配するシェイドであった・・・

「あわわわわ！？」

そして無常にもファリンの足元を走り回るユーノと子猫。そして案の、眼を回し転倒しそうになるファリン。

「ファリン危ない！」

「ファリンさん！」

なのはとすずかは慌てて支えようと駆け寄るが・・・

「大丈夫ですか、ファリンさん？」

トレイを右手でしたから持ち上げるように取り、ファリンの腰に左手を添え、支えるシェイドは、苦笑いしながら言う。

危なかった・・・もう少し遅かったら、にゃんこが怪我をしていたな・・・

「セーフ・・・」

「はふう・・・」

そして、それを見たのはとすずかは床に座り安堵のため息を漏らす。

「はっ!？」

あわー!？ すずかちゃん、なのはちゃん、シェイド君ごめんなさい

家の中に、そう叫ぶファリンの声が響き渡る。

く所変わって、月村家の庭先く

「しっかし相変わらず、すずかの家は猫天国よねえ」

同感だ、そして俺にとっても天国だ!

「ふふふっ」

そのアリサの言葉に嬉しそうに笑うすずか。

「でも、子猫たち可愛いよねえ」

何を言っただ！ にゃんこはたとえ大きくっても可愛いんだよ！

後に・・・この心の叫びを、後悔するシェイドであった・・・

なのは達が楽しく話していたその時

「・・・あ」

この感じ・・・魔力の流れか・・・？

月村家の庭先の一角で、ジュエルシードが発動しようとしていた・・・。

**シェイドと後の魔王とフェレットモドキと原作介入の予感？（後書き）**

次回！猫好きシェイドすら驚愕する事態が！！

おそらく、原作を知ってる方はお解りでしょうが・・・

それでは、また次回。

作者はこれから寝ます。

次の更新は早くて昼過ぎ？

何事にも限度がある、要するに大きすぎるのも考え物という事で（前書き）

一日遅れの更新とか・・・作者である俺は、もはや叩かれても仕方ない野郎ですね。

という訳で、罵声をですね・・・え？ 一ご褒美だろって？

・・・気にしたら負けです。

さて、今回はシェイドが戦います・・・戦うの？ 戦闘絵写とか上手く書けないので、期待はしないでくださいね？

では本編どうぞ・・・

何事にも限度がある、要するに大きすぎるのも考え物という事で

Side:なのは

この感じ……

《なのは》

《うん、すぐ近くだ。》

ジュエルシードがあることに気付いた、なのはとユーノは念話で会話を始める。

《どうするっ?》

《えっと……えっと……》

なのはは、すずかやアリサ、シェイドを見ながらどうつするべきか考える。

《そっだ……!》

何かを思いついたユーノはなのはの膝から飛び降りて走り出す。

「ユーノ君? ……あ」

そっか!

ユーノ意図を理解し立ち上がる、なのは。

「あらら？ ユーノどうかしたの？」

「うん、何か見つけたのかも。  
ちよつと探してくるね？」

アリサに聞かれ、立ったまま答えるなのは。

「大丈夫、すぐ戻ってくるから待っててね？」

そう言い走り出すのは……

Side End Side Change: シェイド

大丈夫……ねえ

嘘をつけないと言うか、下手だな……なのはは。

「すずかお嬢様、アリサお嬢様。」

「うん……お願いしてもいいかな？」

「はい、お任せください。」

「頼んだわよ？」

アリサとすずかに一礼して、なのはの後を追うシェイド。

確かこの後の展開は……そう、にゃんこの危機！

何処まで行っても、優先順位は猫が一番のシェイドであった……

Side End Side Change:なのは

「発動した!」

「ココだと人目が・・・」

ジュエルシードの発動を感じ取るのはとユーノ

「結界を作らなきゃ・・・!」

「結界?」

「最初に会った時と同じ空間。

魔法効果の生じてる空間と通常空間の時間進行をずらすの。  
僕が少しは得意な魔法・・・。」

詳しくは無印なのは第一話をご覧ください。

「あまり広い空間の切り取りは無理だけど、この家の付近くらいなら・・・なんとか。」

そして、魔法を発動させ結界を張るユーノであった。

Side End Side Change:..シールド

これは・・・

「結界・・・か?」



なのは達を追いかけていたシェイドだが、いつの間にか少し見失い、距離を離されていたらしい。

急がないと・・・にゃんこが・・・!

この魔力の発動元を辿れば・・・ってそんな器用な事、

出来ねエよ俺・・・?

とりあえず・・・

木の上に飛び乗り、辺りを見渡すシェイド。

いつたい・・・何処に・・・

「って・・・」

木の上から見渡し始めてすぐ、シェイドは自身の目を疑った。

「!?!」

おいおいおいおいイ!? いやいやいやいや! 流石にねエよ!?

なんなの、あの大きさ!? 大きくても可愛いとは思っけどさ? あの大きさは流石にねエよ!?

確かに、原作知識あるし? 大きくなるのは解ってた、解ってたけど!

「ねエよ・・・」

つい素の口調が出るシェイドであった。

Side End Side Change...なのは

「あ……あ……あ……あ……あれは……?」

「た……多分、あの猫の大きくなりたいて思いが、正しく叶えられたんじゃないかなと……」

アレで正しくなの!?

「そ……そつかあ」

なんとか納得しようとな納得したように自身に言い聞かせるのは。まあ……実際問題として、いまなのはとユーノの目の前には、巨大な子猫と言う矛盾だらけの子猫なわけで……納得するのは難しいだろうが……。

「だけど、このままじゃ危険だから元に戻さない」と

「そっそうだね。」

流石にあのサイズだとすずかちゃんも困っちゃうだろうし。」

流石に大きすぎだと思っの。

「襲ってくる様子はないし……ささつと封印を……。」

歩きたびに地響きを起こす巨大な子猫を見てそう言うのは。

「じゃあ、レイジングハート!」

自身の胸元にある紅い宝石、待機状態の魔導の杖レイジングハートを起動させようとするのは……だがその時。

巨大子猫に飛来する金色の弾丸がなのはの横を通過する。

「・・・あ」

Side End                      Side Change: シェイド

よし・・・なんとか間にあ・・・ッ!

シェイドがなのは達を目視距離で見つけた瞬間、なのはの後ろから飛来する、金色の光を発見する。

「させるかあああああああああああ!!!」

その金色の魔力弾が狙っているであろう巨大子猫の前に咄嗟に体を魔力強化し全速力で駆け出す。

「ふえ!? シェイド君!？」

「危ない!」

驚くのはと、慌てて止めようとするユーノを無視し魔力を纏わせただで金色の魔力弾を蹴り砕くシェイド。

たとえ・・・常識外な大きさでも、子猫を傷付けて良い道理はない!

非殺傷設定だとか、そんなのも関係ない! 痛くないわけでもないだろうし・・・なにより! 可哀そうだろうがああああ!!!

つと、心の中で叫ぶシェイドであった。

Side End Side Change:フェイト

「・・・私のフォトンランサーを」

防御・・・ちがう、打ち消した・・・？

驚きと共に、警戒心を露にするフェイト。

「バルディッシュ・・・フォトンランサー、連撃。」

[Photon lancer Full auto fire.]

そして、今度は単発ではなく連射式のフォトンランサーを放つ

Side End Side Change:シェイド

「ッ！」

一発たりとも、にゃんこには当てません！

手足に魔力を纏わせ、弾き軌道をずらし、子猫を守るシェイド。

そして、シェイドの両手両足の魔力光である漆黒と、フェイトのフォトンランサーの魔力光を見て・・・

「なっ魔法の光、そんな・・・」

「どっどっということなの!？」

驚き言うのはとユーノ。

「なのはお嬢様、ユーノ様！ 驚いてないで、対策があるのなら、手を貸してくださいっ」

話とか、説明は後だ・・・流星にこの数はキツイっ

「うっうん！」

レイジングハートお願い！」

〔Standby ready・Setup〕

レイジングハートを起動し、バリアジャケットを纏うのは。そして、シエイドと巨大子猫の方へ向かいながら飛行魔法を発動する。

〔Flier fin〕

そして巨大子猫の背に降り立ち・・・

〔Wide area Protection〕

広範囲シールドを展開する。

Side End Side Change:フヘイト

「もう一人・・・？」

二人いたの・・・？

「・・・」

猫の足元を狙うフェイト。

「!?!? 間に合わないっ」

シェイドが弾こうとするが、間に合わず巨大子猫は転倒する。

Side End Side Change:ユーノ

そろそろ、驚かなくなっただけど・・・僕がなのはに教える事は、もう何も無いのかも・・・。

飛行魔法で離脱し着地したなのはを見て思うユーノ。

そして、対峙する二人の魔法少女と、執事の少年・・・

「同系の魔導士・・・ロストログアの探索者か？」

ジュエルシードが何か知ってる?・・・それじゃあ

「間違いない、僕と同じ世界の住人。

そしてこの子、やっぱりジュエルシードの正体を・・・」

「バルディッシュと同型のインテリジェントデバイス・・・」

「バル・・・ディッシュ?」

「それと・・・」

シェイドの方を見るフェイト。

「大丈夫かい、にゃんこ？ 怪我してないかい？」

倒れている巨大子猫を心配するシェイド……空気読め……

「……………」

「あの、シェイド君……？」

「え？」

「……………ロストロギア、ジュエルシード。」

「Scythe form setup」

シェイドのことは諦めバルディッシュをサイスフォームに変えるフ  
ェイト。

「っ！？」

それに驚くのは。

「申し訳ないけど、頂いていきます。」

そう言うと、なのはに斬り掛かるフェイト。

「っ！」

「Evasion・Flier fin」

それを、飛行魔法で緊急回避するのは。  
地上と上空で睨み合う二人の魔導士の少女。

Side End      Side Change: シェイド

訳が解らない内に、戦闘が始まったか……  
俺としては、これ以上にゃんに被害が及ぶのは避けな  
ければ……

〔Arc Saber〕

「ふっ……！」

シェイドが考え事をしている内に、再開される戦闘。  
フェイトがサイスフォームの魔力刃を飛ばし……

「っ！」

〔Protection〕

なのはが防御魔法でガードする。

ぶつかり合った魔力が小さな爆発を起こし、なのはの視界を一瞬だけ塞いだ。

「なのは！」

ユーノの声とほぼ同時でなのはが姿を見せるが……

「ッ!？」



フェイトがサイスフォームで斬り掛かり、咄嗟にレイジングハートで受け止め競り合うのは。

すごいな・・・あれ。

そんな二人の戦いを見ながら思うシエイドであった。

「なんで・・・？　なんで、急にこんな・・・」

競り合いながら訊く、なのはに・・・

「答えても・・・多分意味がない。」

そう答えるフェイト。

「っ！」

なのはとフェイトはそこで、互いに距離をとり、なのははシエイドの隣へ、フェイトは木の太い枝の上へとそれぞれ降り立つ、そして・

[Device form.]

[Shooting mode.]

互いにデバイスの形状を変え、向け合い・・・

[Divine buster Stand by.]

なのははディバインバスターの発射体勢をとり・・・

「Photon Lancer Get set」

フェイトはフォトンランサーを撃つ構えを取る。

Side End Side Change:なのは

きつと、私やシェイド君と同年くらい。

綺麗な瞳と、綺麗な髪……だけど……この娘……

そんな事を考えてると、巨大子猫が起き上がる。

そして、一瞬気をそらしてしまったのはとシェイドに向けて……

「……ごめんね。」

「fire」

「っ!?!」

「しまっ!?!」

フェイトのフォトンランサーが放たれる。

そして、なのはは吹き飛ばされ、シェイドはなんとか耐える。

「なのはっ!?!」

そして、なのはを助けに、ユーノは走っていった。

Side End Side Change:…シェイド

なのははユーノに任せればいい・・・

問題は・・・このままだと、にゃんこが酷い目にあつと言  
うことだ・・・

なんとしても、避けなくては・・・

そう考えるシエイドに、バルディッシュを向けるフェイト。

「少々、乱暴ではありませんか？

見ず知らずの、お嬢さん？」

「貴方は・・・何者ですか・・・？」

警戒したまま、バルディッシュを握る手に力を込めるフェイト。

「俺は、ココ・・・月村家にて執事をしています。

シエイド・ロードスターと申します。

黒衣のお嬢さん」

丁寧に挨拶をするシエイド。

「・・・ロストロギア、ジュエルシードの回収の邪魔をするなら  
・・・」

またフェイトはフォトンランサーを放とうと、魔力を溜める。

邪魔か・・・そうだな。

「にゃんこ・・・もとい、あの猫に危害を加えないのであれば、邪  
魔はいたしませんよ？」

「？」

シェイドの言葉に不思議そうに首をかしげるフェイト。

「ですが・・・見たところ、お嬢さんの力は電気の様だ・・・。

ですから、少なからず、あの子猫は傷つくでしょう、違いますか・

・・・？」

「・・・・・・・・。」

じゃあ、貴方も・・・私の邪魔を・・・。」

「勘違いなさいませぬ様、お願いします。

お嬢さんがやったのでは、という意味ですので。」

「どういう・・・。」

まだ解らないのかこの子・・・？

確か頭は良かったと思ったんだが・・・

「つまり・・・こういうことです。」

シェイドは巨大子猫の体に触れ、自身の魔力を使い猫の体内のジュエルシードを見つけ、ジュエルシード本体にのみ魔力を送り込み、子猫と切り離す。

「こうすれば良いのですよ。」

そう言って、優しく微笑むシェイド。

「後はご自由になさって下さい。」

そう言い、一礼し子猫を抱きかかえ、なのはの元へ向かう。

多分この辺りに・・・居た。なのはとユーノ。

・・・どうやら大丈夫みたいだな。

なのはに近づき確認するシェイド。

「あ・・・・・・・・」

そんなシェイドに声をかけるユーノ。

「はい、なんでしょうか？」

「やっぱり僕が喋っても、驚かないんですね・・・。

君も・・・魔導士、なの・・・？」

「その話は後で・・・・・・・・」

そうシェイドが言った瞬間、先ほどまでシェイド達が居たところに無数の金色の魔力弾が雨のように降り注いだ。

どっちら、終わったようだな。

「とりあえず、なのはお嬢様を運びましょう。」

「うっうん。」

何事にも限度がある、要するに大きすぎるのも考え物という事で（後書き）

昼頃更新とか言っつて、すみませんでしたああああああっ！

o r z

はい、また寝過ぎしてたA c tです・・・

ダメですよ、有言実行しないと・・・。

追記：誤字修正ノフェイトのセリフ「・・・こめんね」になっていたのを「・・・こめんね」に修正。

誤字報告ありがとっございます。

## 執事の休日・女神の携帯（前書き）

今回はシェイドが月村家から休暇を貰って町に行ったり、なのはと会話したりするお話であり、シェイド自身の自分に関する考察などもあります。

## 執事の休日・女神の携帯

みなさん、どうもシェイドです。

今日は、すずかお嬢様と忍お嬢様より休日をいただいたので、町で買い物しようと思動中です。

移動の間に、フェイトと会ったあの日のその後を振り返ろうと思う。

そう・・・あの後、俺は・・・

〈回想・巨大子猫事件のその後。〉

「よつと・・・ふう」

結構軽いな・・・

なのはを背負いそう思うシェイド。

「さあ、ユーノ様？ 俺の肩にでも乗っていてください。」

「え？ あ・・・うん、ありがとうございます。」

シェイドに言われたとおりに肩に飛び乗るユーノ。

「では、行きましょうか。」

子猫を抱き、なのはを背負い、ユーノを肩に乗せ屋敷へ戻るシェイド。

そして、戻った時・・・



「なのはちゃん!？」

「ちょっと、どういづことよ!？」

と、ずずかとアリサに心配される事となり・・・

「なのは!？」

「大変! ノエル!」

「はい、忍お嬢様。」

騒ぎを聞きつけた恭也と忍、忍に呼ばれたノエルが駆けつけるのであった。

まいったな・・・

《ユーノ様・・・その、先ほどの事は、黙って置いた方が宜しいでしょうか?》

《うん・・・その方が、いいと思う。》

まあ、今はまだ話すには早いよなあ・・・

《では、そう致しましょう。》

場所は移り、客室のベッドになのはを寝かせ、心配する面々。

「申し訳ありません・・・恭也さん・・・俺がもう少し早く追いつけていれば・・・」

「どづいう事だ・・・？」

「はい、実は子猫が木に登って降りれなくなっていたようで・・・  
なのはお嬢様が木に登り助けたところ、落ちてしまわれたようで  
・・・  
・・・申し訳ありません・・・。」

そう言つて、頭を下げて謝るシエイド。

まあ、これでは・・・なのはが目を覚ました後に話を合  
わせて貰えば、大丈夫か。

「そうだったのか・・・  
頭を上げてくれシエイド。

君が謝る必要はない。

なのはを運んでくれてありがとう・・・。」

「恭也さん・・・。」

嘘をつくのは・・・やっぱ、いい気分では無いな・・・

それから時間が過ぎ・・・なのはが目覚めたのは、夕方になってか  
らだった。

その後、念話を使い口裏を合わせて事情説明をした。

《・・・シエイド君、少しお話してもいいかな・・・？》

そう訊いてきたのは・・・

《今は、ゆつくりとお休みになれた方が宜しいかと思いますが……》

怪我はたいした事無かったとはいえ……あまり無理をするのはよくないだろ。

《でも……》

そんな悲しそうに見ないでくれよ……  
なに？ 俺が悪いの？ 勘弁してくれ……

泣きそうな顔でシェイドを見るのはに心の中でそう囁くシェイドだった。

《なのはお嬢様…… 俺はいつでもこの月村家にいますし、話なら後日でも宜しいではないですか。》

《……そう、だね……ごめんね？ シェイド君……》

《今はゆつくり、お休みください。》

《うん……ありがとう。》

そして後日、話をする事になったのだった。

（回想END）

という事になったんだが……今日町に出るついでになのはと話す事にもなっている訳で……

なんて話せば、いいんだろうな……

そんな事を考えるシェイドであった。

Side End Side Change:なのは

今日は午後から、ずっと気になっていたことをシェイド君が話してくれるそうです。

切欠は、すずかちゃんのお家での猫さんの事・・・  
シェイド君のことも気になるけど、私はあの娘とも、お話できないかなって、思ってるんだけど・・・

《ねえ、ユーノ君・・・》

学校で授業を受けながら、家にいるユーノに念話で話しかける。

《彼のこと?》

《うん・・・シェイド君も、ユーノ君と同じ世界の人なのかな・・・?》

《おそらく・・・でもデバイスを持ってないみたいだし、術式もミッド式とは違うから、本人に聞いてみないとわからないよ?》

《そっか・・・》

ミッド式・・・私やユーノ君それに、あの金髪の娘が使っている魔法の略称。

砲撃とか凡庸性が高いつて、ユーノ君から聞いたの。  
でもシェイド君の魔法は・・・私たちのと逆だった・・・  
考えても仕方ないのかなあ・・・?

そんなことを思いながら授業を受けていくのはであった。

Side End Side Change:シエイド

「とりあえず・・・早く“コレ”使えるようにしねえとな・・・」  
そう囁きながら、女神直通の携帯電話（バッテリー切れ）を見ながら言うシエイド。

とりあえず、ショップに持っていけば機種くらいわかるかね？

機種さえわかれば・・・充電器を買っくらいならまだ余裕もあるしな。

服はとりあえず私服数着はあるし、仕事中は忍様が支給してくれた執事服を着ているしな・・・

・・・なんで、すぐ用意できたんだ？

いや、考えるのは止そう・・・だって忍様だし・・・

などと心中囁きながら一路、携帯電話も扱っている家電量販店へと歩いていくのだった。

「ここか・・・忍様が言っていたのは・・・」

結構大きいな・・・さて、じゃあ早速調べますか。

そしてシエイドは家電量販店内の携帯ショップへと歩いていく。

えっと・・・この辺り、だよな？

お、あつたあつた。

「すみません・・・少々お訊きしたいのですが・・・？」

携帯ショップの店員に声をかけ、携帯の充電器が壊れてしまったので充電器を探していると言って店員に携帯を見せる。

「はい、こちらの機種ですと・・・こちらの充電機器がお使い頂きますよ？」

店員はにこやかにシェイドに告げて、ポータブル式充電器をシェイドに進める。

「そうですね、ありがとうございます。」

では一つ頂けますか？」

「ご購入ですね、ありがとうございます。」

そして、進められたポータブル充電器と充電器用の電池を買い、店を後にするシェイドであった。

さて、これでアイツに連絡を取れるようになるか・・・。

そう思いながら、公園のベンチに座り、携帯の充電を始める。

「さて、充電が終わるまで・・・何をするかだな・・・。」

とりあえず、今後介入するかとか・・・介入するならばデバイスをどうするかだな。

技や能力使えるっていつても・・・使い方がわからない能力とかもあるし。

固有結界系は試してみたが・・・まあ、本人以外は使えないわな。

ようは心象風景の具現化な訳だし・・・

まあ、だが投影はできるんだよなあ・・・流石に宝具は無理だったが。

当然か・・・だって俺実物知らないわけだし。

そんなことを空を見上げながら考えるシェイド。

「にしても・・・いい天気だな・・・色素薄い俺にとっては最悪だが・・・」

などと苦笑しながら木陰へ移動する。

今のところ使えるのは、投影魔術を使った似非黒鍵の投射と七夜の体術と身体強化の魔法・・・

後はただ、魔力を脚や拳に纏わせた魔力打撃による八極拳等の近接格闘か・・・

俺って、もしかしなくてもベルカ式ですか？ しかも古代ベルカ式？ 確かコレも一種の稀少能力レアスキルだっけ？

我ながらかなりチート性能だとは思うが・・・でも結構扱えない能力もあるんだな。

本質的に本人にしか仕えない能力。

例えば心象風景の具現化や未知物質の生成とかは無理だった。

だから某弓兵さんや正義の味方君のような宝具の複製とか彼らの無限の剣製も無理だ。

どうい物なのか理解し、更に製造過程と内包物質比率、

宝具とか思念武装なんかには更に様々な要素もある。

俺の使う似非黒鍵も実際はただの形を似せた魔力の塊つてのに近い。

要するに・・・投射版スティンガーブレイドだな。

「って・・・おいおい」

考えてたら、どんどん介入する流れになってないかコレ？

苦笑しそう心中で囁くシェイドであった。

そして時間は過ぎ、昼時。

「腹減ったなあ・・・」

そろそろ充電も・・・終わってるな。

どこかで飯にでもするか。

そう考え、歩き公園を去るシェイドは一路食事のために移動するのであった。

そして、たどり着いた先は・・・

どうして、ココに来たんだ俺は・・・？

翠屋の前でそう心中愚痴るのだが・・・

まあ、来たものは仕方ない、大方どうせ世界サクシャノキマグレの意思だろうしな・・・

そう思いながら店内へ入っていくのだった。



「いらつしやいませ・・・ってあら？」

「こんにちは。」

接客をしにきたのは、なのはの母であり高町家の実質頂点とされる高町 桃子であった。

珍しいな・・・いつもは厨房の方にいるはずなのに・・・なるほど。

シェイドは店内を見て現状を把握した。

「お忙しそうですね？」

「ええ、バイトの娘が急に風邪で休んでしまって・・・」

苦笑気味に微笑みながら言う桃子。

席は空いてなさそうだし・・・まあ、困ってるみたいだし。

「よろしければ、お手伝いいたしますが・・・？」

「そうね・・・それはありがたいけど悪いわ、食事に来たんでしょ？」

申し訳なさそうに言う桃子にシェイドは・・・

「いえ、そこまで空腹ではないので・・・そうですね、手伝った後に賄を頂けるのであれば」

笑顔でそう桃子に言うシェイド。

「えっと・・・それじゃあお願いしようかしら？」

「はい、任せてください。」

そうして、シェイドの翠屋での臨時バイトが始まったのであった。

省略という名の手抜き。

いまなんか、世界の意思の手抜きを感じたような・・・

気のせいです。

そうか、きのせ・・・！？

辺りを窺うシェイド。

「あら、どうかしたのシェイド君？」

「い、いえ・・・」

・・・気にしたら負けだな。

「そう？ それじゃあピークも過ぎたから、もう抜けても平気よ？」

お疲れ様、手伝ってくれてありがとうね？」

朗らかな笑顔でシェイドに言う桃子。

「あ、いえいえ俺が勝手に手伝いを言い出しただけですから。」

「それでも、ありがとう」

「えっと……それじゃあ、どういたしまして。」

照れ笑いを浮かべて言うシェイド。

なんか……いいな、こういうの……親に褒められる  
って、こんな感じ……なのかな？

前世での俺の親は……いや、やめておこう。

「ちょっと待っててね、すぐにご飯用意するからね？」

「あっはい。」

そして、賄を食べたシェイドは、朝にいた公園へと行くのだった。

「さて……一応、食事も済んだし電話してみるか……」

充電の完了した携帯を取り出し、女神へと電話をかけるのであった。  
……が。

数回のコール音の後、聞こえてきたのは……

【こちら貴方の女神の携帯です

ごめんなさいねえ、今少し手が離せないのよ。

またかけなおして頂戴？】

「……………」

ゆっくりと、電話の通話終了ボタンを無言で押すシェイド……

「……………落ち着け、俺……………COOLに行こうじゃねえか……………」

え？ なにこれ？ 意味無いんじゃない？ ……OK

ここは、ゆっくり整理しようか？

今俺はアイツに電話かけた……………ああ、間違いねえ。

通話履歴にも残ってる。

……………で、繋がったのはいい、ああ、使えるってのは解ったからな。

それで……………なんで……………

「なんで……………留守電でしかもメッセージ残せねえんだよ！！！！」

公園の木を全力で殴るシェイドであった。

「はあ……………はあ……………ッ

とりあえず、今日の夜にでもかけ直すか……………」

なのはとの約束まで、まだ少し時間もある、それまでに何を、どう話すか考えておかないとな……………

Side End Side Change:なのは

「それじゃ、行こうかユーノ君？」

「うん、そうだね。」

一度自宅に帰り、着替えを済ませたなのはは、ユーノと共にシェイ

ドの待つ自然公園へと向かうのだった。

場所は移り、海鳴自然公園。

「えつと・・・あ、居た。」

木陰で眠るシエイドを見つけるのは。

「シエイド君？」

「寝てる・・・ね」

「うん」

なんとも気持ちよさそうに眠るシエイド。

・・・シエイド君の寝顔って・・・なんだか女の子みたい、  
かわいいかもノノノ

などと考えるのはであった。

Side End Side Change:シエイド

ん・・・？

やっべ・・・考え事したら寝てたか・・・

目を覚ますシエイドの目の前にはなのはとユーノが居た。

「・・・えつと、おはようっ？」

目覚めたシェイドに言うのは。

「あ……はい、おはようございます、なのはお嬢様。」

「うん。うん。」

「……………」

「……………」

「気まずい……………」

「えっと……………お話、きかせて……………?」

「そうですね……………なにから、話しましょうか?」

「僕から質問しても……………いいかな?」

ユーノがなのはの肩から降りて、シェイドの前に座る。

「ええ、構いませんが……………出来れば結界を張っていただけますか?」

流石に……………その、周りの目もありますので……………」

流石に……………フェレットと話すとか、なあ?

シユールすぎるだろ……………」

「あ、そうだね、うん少し待ってて。」

そう言い結界を発動させるユーノ。

「なのはお嬢様も、立ってないで座ってください?」

「あ、うん。」

シェイドの前に座るなのは。

「それで、訊きたい事なんだけど・・・」

「なぜ、魔法が使えるのか・・・ですね?」

ユーノの言いたいことを途中で引き継ぐシェイド。

「・・・うん。」

「なぜ使えるのか・・・そうですね、今の俺に言えることは、ただ使えるから・・・としか言えません」

「どっどっして?」

なのはがシェイドの言葉に疑問を投げかける。  
ユーノも同じ気持ちのようだ。

「なのはお嬢様・・・?」

「すずかお嬢様から、俺の事聞きましたよね・・・?」

「あ・・・」

「どっどっして?」 なのは?」

気まずそうな顔のなのはと、頭に疑問符を浮かべるユーノ。

「えっと……」

「俺には、つい数週間前より以前の記憶がないんですよ……ただ、知識はある、執行も出来る。」

なのはの代わりに優しく笑みを浮かべながら答えるシェイド。

「それって……記憶喪失……？」

でも、それなら……まさか僕と同じ世界から次元漂流者になって……？」

などと、呟きながら思考するユーノ

「ユーノ君？」

「あ……ごめん、ちょっと考え事しちゃって……」

そう謝罪するユーノ。

次元漂流者ねえ……

それで記憶まで飛ぶこととかあるのか？

「なので、なぜ使えるかと訊かれても……俺は答えを持っていないです……」

ですが……」

まあ、知られたからには手伝ったほうが良いよなあ……子供にだけ危ないことさせるとかは出来ないし……



「俺でよければ、お二人をお手伝いしますよ？」

「「えっ？」」

二人同時に驚いたような顔をするユーノとなのは。

どうしてそこで驚くんだ？

まあ・・・いいか。

「俺も、一応は魔法を使えますからね。」

お二人だけに任せるとするのは・・・。」

「でも、危険なんですよ？」

その危険なことに、女の子巻き込んだ本人が言うのか・・・？

「それは解っていますが・・・ですが、もう知ってしまいましたから。」

そう優しく言うシエイド。

ここから、物語はレールをはずれ、改変されていく・・・

そして、今後の話や、ジュエルシードについての話をシエイドは訊き、時間も遅いということと本日解散となった。

そして、時は過ぎその日の深夜・・・

＼月村家・中庭 AM02:19＼

さて・・・まあ、介入って形になるだろうな・・・

なら、いろいろと用意は必要なんだが・・・

アイツに連絡一応しときたいんだよなあ……

夜空の月を眺めながら、心中囁くシェイドは、携帯電話を取り出していた……

これで出なかったら、マジでコレ捨てんぞ……？

数回のコール音……その後、電話が繋がる。

【はい？ もしもし？】

「はあ……やっと繋がったか……」

【あら？ あらあら？ 貴方が電話をかけてくるなんて珍しいじゃない？

寂しくなったのかしら……？】

電話口の音声でもわかるほどニヤついた声が聞こえてきた。

「はあ……あのなあ？」

こういう連絡用の携帯を渡すなら、充電位しとけよ……」

【へ……？】

……コイツ、完全に充電のこと忘れてたな……？

【わっ忘れてないわよ!?!】

ちよっとしたジョークじゃないの】

「……その言訳、無理あると思わないか？」

【うう……】

「はあ……まあ、いい。  
それより聞きたいことがある。」

【両親の事と自分の出身世界についてかしら？】

「……ごういう時はその能力弁理だな。」

まあ、その通りだが、後もうひとつ……デバイスは作れるか？

【1つずつ、答えましょうか。】

「ああ、頼む。」

【まずは、第一の問にたいする回答としては“居た”と言ったところね。】

「つまり、今は居ないってことだな？」

【というより貴方は作られた存在だもの、遺伝子データの元は居ても、親は元から居ないも同義よ？】

「……もしかしなくてもアレか？」

【そう、アレよ？】

「人造魔導士……なんとも……凄いな。」

【本来もう少しまともな生まれ方にするつもりだったのだけれど……】

・ね。】

「……おい、まさかとは思いが……」

【ちょっとした手違いよ?】

「頭痛くなってきた……」

「まあ、いい次の回答は?」

【第二の問にたいする回答ね?】

それならば事実、貴方にはミッドの方に一応戸籍があるわ。  
私が作ったものだけね。】

「そうか、なら出身はミッドチルダでいいな……」

【ええ。】

「よし、じゃあ最後だ。」

【デバイスを作れるか……ね?】

「ああ、どうなんだ?」

【私には無理と言っておくは。

でも、貴方の能力を使えば可能よ?】

「どづいつことだ?」

「言っておくが、俺は自分の能力使いこなせてないぞ?」

【自分で理解し、構造を把握し理解したものしか作れないのよね?】

「ああ、その通りだ。」

【なら、調べて理解すればいいじゃない？】

「……どうやって？」

「……って、ああ、もしかしてアレも使えるのか……？」

【当然でしょ？ 貴方が望んだのでしょ？】

「そうだが、まさか使えるなんて思わないだろ……」

「アレは某ハーフボイルドな探偵の相棒の固有能力じゃないのか？」

【ある意味で正解、だけど……】

「アレは彼だけが特別で使えるものではなく、一種の後天的なものじゃなかったかしら？」

【それにコレは、世界の意味よ。】

「ご都合主義だな世界の意味……」

【いいじゃない、使えるんだから。】

「まあ……そうだな。」

【質問はこれ位かしら？】

「ああ……そうだな。」

【なら、また何かあったら連絡しなさいね？】

「気が向いたら、そうするよ。」

【ええ、そうして頂戴。

私も忙しいのよ。】

「忙しい・・・?」

【ええ・・・あの老害がまた失敗してくれたおかげで・・・ね  
そうだわ、言っておくことがあったのよ・・・】

「まさかとは思うが・・・俺以外にも?」

【やっぱり、貴方頭いいわね、その通りよ・・・。】

「マジか・・・まあ、俺には計画性はないし、そいつの考え聞いて  
乗るって形にするか・・・」

【そう、解ったわ。

あちらにもそう連絡入れておくわね?】

「頼むよ、じゃあ・・・な」

【ええ。】

そして、通話終了のボタンを押し、携帯電話をポケットにしまう。

俺以外の、もう一人の転生者・・・ねえ?

どういふ奴かは知らないが・・・出来ればまともな奴がい  
いな・・・

などと夜空を見上げて考えるシェイドであった……

Side End Side Change……?……?

【と、言っわけなのよ】

「なるほどねえ。」

「てことはアレだろ？」

「そいつと協力してもいいって、それでいいんだよなア？」

【ええ、そうよ。】

「んじゃ、今度会いに行つて見ますかねえ」

一人の少年が、ビルの屋上で電話をしながら遠くを見るように囁く。

「さてさて、面白くなりそうじゃねえの。」

携帯の通話終了ボタンを押し、笑いながら言う少年。

「ココから俺のターン」

次回へと続く……

「最後まで言わせてくださいー!？」

## 執事の休日・女神の携帯（後書き）

えー・・・まずは遅れたことへの謝罪を  
すみませんでしたあああああああ！

いや、ほんと・・・こんな駄犬をお許しください・・・

言訳を言いますと、活動報告にも書いてあります通り、風邪を患い  
まして・・・

病院に行ったところ・・・ええ、見事にインフルでした。

そのまま入院・・・まではよかった。

その入院後、肺炎になりかけまして・・・入院が長引きました・・・  
一瞬サンズリバーにて某赤毛のサボリ魔な死神にあった気がしまし  
たが・・・

ええ、何とか戻ってきましたとも。

というわけで、今後もg d g d続きます。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3868x/>

---

魔法少女リリカルなのは～原作破壊の転生者～

2011年10月28日12時17分発行